

1コリント1章 18-31節 「この世の知恵と神の知恵」

1A 十字架の力 18-25

2A 神の召し 26-31

3A 隠された奥義 1-9

4A 御霊による解き明かし 10-16

本文

今、私たちは、三つの事柄について話し合いましたが、すべてが教会における具体的判断ですね。私たちは、聖書の教えについて、キリスト教の教理については数多くを聞いています。けれども、その神の真理を、いま質問に出てきたような状況の時にどのように適用させていけばよいのか、それが私たちには大きな挑戦となります。

コリントにある教会について誤解してはいけないことは、この教会が神の教えについて無知であったのではない、ということです。いや、むしろとても豊かなキリストの知識を持っていたという点が重要です。1章 4-7 節を読んでみましょう。「私は、キリスト・イエスによってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも神に感謝しています。というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。それは、キリストについてのあかしが、あなたがたの中で確かになったからで、その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。」

知識を持っていた教会でした。何しろ、そこでパウロが一年半の間、腰を据えて教えていました。そしてアポロなど、数々の有能な説教家がやって来て、彼らを教えていました。そして、ここを読むと知識、ことばだけでなく、賜物にも恵まれています。聖霊の賜物の現れもありました。さらに、イエス様の現れを待ち望んでいる、すなわちキリストの再臨もしっかり信じていたのです。そのような恵まれた環境の中にいた、ということを忘れてはいけません。

それにも関わらず、仲間割れの問題がありました。これでは世の中と変わりません。何となく、だれだれと一緒にいるほうが安心だ、として、教会の中で人々を受け入れていくという仕える姿がありません。新しい人は優しくしてもらっても、真実に迎え入れられているように感じることはありません。それは、仲良しグループが教会の中に存在するからです。世の中において派閥がありますが、まさに世がそのまま教会の中にも存在するのです。

なぜそうになってしまうかと言いますと、聖書の知識はあるけれども、それを具体的に教会生活の中に落とし込んでいないからです。個人の素養、聖書知識の習得のためには精力を注ぐのです

が、実際の教会生活において、他の兄弟姉妹との関わりにおいて、どのように神の真理の中に生きればよいか、その知恵に欠けているのです。そこで、これまで自分の培ってきた世の常識に頼って、教会の事柄も判断しようとする。これが、まさにコリントの教会の中で起こっていたことです。

そこでパウロは、私たちキリスト者が知らなければいけない知恵の出発点をしっかりと教えます。

1A 十字架の力 18-25

18 十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

神の知恵のすべての出発点は十字架にあります。十字架のことばとは何でしょうか？これは、「私たちを救う力」です。そして、救いとは何でしょうか？私たちを罪から救うことです。ヨセフに対して天使が、「その名をイエスと名づけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。(1コリント 1:21)」と告げました。私たちが神に対して罪を犯しました。その罪によって、自分は神から離れた者となりました。そして死んで、死んだ後に裁きを受けなければいけません。しかし、神がその罪を十字架の上のキリストの上に置き、私たちの罪の赦しを備えてくださいました。この方のみ救いがあることを信じ、この方のみを拠り頼む時に、私たちは罪から救われるのです。この十字架のことばが、私たちにとっての知恵なのです。

19 それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」 20 知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。 21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

もし、十字架のことばにある神の知恵をバイパスして、通り越して、教会で起こる事柄に取り組むとしましょう。すると、初めはうまく言っていると感ずきます。ところが、どんどんおかしなところに動いていることに気づきます。自分は正しいと思って突き進んでいるのですが、いざ立ち止まってみると、自分こそがつまずき、問題を引き起こしている原因とさえなっていることに気づきます。自分が頑張れば頑張るほど、かえって問題がこじれます。それは、ここ 19-21 節に書いてあるとおりです。神がその自分の知恵を愚かなものにしておられるのです。「このことは正しい」とか、「こうすればうまくいく」と思っていることを、ことごとく無きものになっていきます。それは、この世の知恵だからです。自分が知らず知らずのうちに、御霊の新生を経験する前に培ってきた世の知恵を教会の中にも当てはめているからです。だから、神が取って行き詰まりを与えておられます。

22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。 23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かです。

ようが、24しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。25 なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

ユダヤ人の問題とギリシヤ人あるいは異邦人の問題を取り上げています。ユダヤ人は、しっかりとメシヤを信じています。旧約聖書を信じています。そこから生じる特殊な問題です。それは、メシヤが諸国の民を打ち砕き、イスラエルの残りの民を敵から救い出し、そしてこの世界を強い腕で治められるという預言を信じていました。ところが、それとは裏腹に、ユダヤ人指導者に死刑を宣告され、ローマに十字架刑の宣告と執行を受けました。だから、つまずきです。

けれども、世の知恵の代表であるギリシヤ人は、十字架につけられたキリストを受け取っているのか？「愚か」であるとします。愚かであるというのは、どういうことでしょうか？一つは、ギリシヤの神々は聖なる神、義なる神ではないということです。欲望や願いをかなえる神々がいたとしても、聖なる神、義なる神ではありませんでした。だから、「私たちの罪のためにキリストが死なれた」と言われても、なぜ自分は罪人として断罪される必要があるのか？と思うのです。「罪」の概念がありません。

次にギリシヤ人の神々には、「与える愛」がありません。人々を自分の怒りや意志にまかせて支配する神々はいても、人のために命を捧げる愛というものがあまりにも愚かです。私が鮮明に覚えているのは、美術館での有名な絵画展で、キリストの十字架像の絵画がありましたが、隣にいる若い男性が、知人に、「彼が救い主ってキリスト教では言うらしいよ。」と薄笑いを浮かべながら語っていました。これは「愚か」だ、ということです。このような弱々しい、そして他の誰かのためにすべてを捨てて救おうとする姿は、あまりにも惨めで、なさげなく、愚かに見えるのです。

では、キリスト者にとってはどうでしょうか？十字架につけられたキリストこそが、神の力であり、神の知恵であります。愚かに見えるところに実は世の知恵よりもはるかに賢い知恵があり、弱く見えるところに実は、この世の強者よりもさらに力強い神の力があります。

私たちが、教会のことについて知恵を尽くして具体的なことを考える時に、もし次のことを忘れていたなら、ギリシヤ人と同じような知恵を使っていることとなります。一つは、「私に罪がある」という真理です。自分の罪のことについて、それを隠そうとする。また、罪についての指摘を受けると、極端に嫌がる。自分が間違っていることをしているのだ、という事実を決して耐えられない。神の愛というのは、ただ今、自分がしていることも含めて是認してくれるのであれば、受け入れたい。

このような考えを持っていれば、あのむごたらしい十字架刑など必要なかったのです。自分の罪が明かされることが嫌ならば、十字架につけられたキリストを見ることもできないでしょう。なぜなら、その残虐なローマの十字架は、「あなたの罪は、聖なる、義なる神の前でこれだけ重いものなの

だ。」ということ、そのまま教えているからです。

十字架についてのもう一つの神の真理は、その無条件を、愛を受け入れられない人もいます。自分の罪に失望します。そして自分に絶望します。だからこそ、神はそのありのままの罪深いあなたを全面的に受け入れるために、ご自分の御子を十字架の死に引き渡されたのです。この一方的な愛を受け入れないことがあります。自分が赦せない、あるいは人には受け入れられないだろう、その他のいろいろな思い煩いで受け入れられないのです。その人の考えている知恵は十字架を通過していない、迂回しているのです。

ですから、キリストの十字架なしの知恵は、とても脆いものです。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。(1ヨハネ 4:18)」とありますが、絶えず、自分は神から否定されるのではないか、自分は人から否定されるのではないか、という不安や恐れがあります。だから、教会の中でも、自分が守られるための言葉を放ちます。あるいは先ほど話したように、罪の意識が薄いと、自分でできることをして、やりがいを見つけようと思って教会のことを考えます。このように、自分の罪意識が薄いと、コリントにある肉の行いの全ての温床になっていきます。

2A 神の召し 26-31

26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

教会に集う者たちは、自分が選ばれて、神から召されたという確信がなければいけません。それには、自分がキリストを十字架につけるほどの罪人であることを認めるのです。キリスト者だと言っても、実はまだ自分が愚か者だと気づかない人がいます。いろいろな知識はあり、あるいは霊的と呼ばれる体験さえあるかもしれません。けれども、弱い者であることに気づいていません。取りに足りない者、見下されている者だと思いません。自分に誇りがまだあります。そういう人は、十字架の前に行って、自分がいかに罪深く、愚かで、取るに足りなく、何も善がなく、どうしようもないということを認めなければいけないのです。教会生活を送っていても、もしその認知がなければ、真剣に神の前に出て深く悔い改める時間を取る必要があります。

この「愚か」というギリシヤ語は、かなり強い意味を持っています。差別用語になっている「白痴」という言葉がありますね。英語では moron の原語になっている言葉です。私たちが自分のことをそう見なしているでしょうか？ペテロが「私は、自分のいのちを捨てても、あなたに付いていきま

す」と言ったのに、その舌の根が乾かぬ内に、「あの人は知らない」と言って主を呑んだのです。こんな惨めで、愚かな自分の本当の姿が福音書に堂々と記録されて、その彼だからこそイエス様は選ばれて、彼を教会の指導者として立て、実を結ばせたのです。「まさに、これは私だ」と不自然なく読める人にこそ、神の知恵があります。

30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。31 まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

これは、十字架のキリストにある神の知恵を持っている人の姿です。霊的に、情緒的に安定しています。神によってキリスト・イエスのうちにいることを自己存在として認識しています。この手紙の著者、使徒パウロはその自己認識を持っていました。「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。(1テモテ 1:13-15) 過去に自分が行ったことの悪を、包み隠さず、話すことができます。自分が罪人であることを認めているのです。しかも、「罪人のかしらです」とまでの認識があります。そして、そこまで大胆に言えている理由は、神の恵みの大きさをみて、圧倒されていて、恵みのゆえに恐れおののいているからです。

このように、キリストの十字架につけられている自分、自分を愛して命を捨ててくださったことを受け入れている自分を持っている時に、今、生きているのは自分ではなくキリストであり、この方を信じる信仰によって生きているのだ、ということが分かります。この神の知恵を持っている人であれば、教会の中における事柄を世の知恵ではなく、御霊によって与えられる知恵と知識によって判断することができるようになります。

3A 隠された奥義 1-9

そして、十字架につけられたキリストにある知恵を見ると、二つのことに気づきます。一つは、「神の力」の現れを求めるとのことです。

2:1 さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行つたとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。2:2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。2:3 あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。2:4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。2:5 それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささ

えられるためでした。

コリントにある教会でパウロが気をつけていたのは、「人間の知恵ではなく、神の力にささえられる」ことでありました。ディスカッションで話しました三つの事柄は、すべて神の力で支えられなければいけないものであります。ここで大事なのは、「こうやったら、こうなるのではないか？」という思考は人間の知恵だ、ということです。例えば、私たちの教会のことを考えてみます。私は長いこと前から、「東京の東部でカルバリーチャペルを始めたい」という思いが与えられていました。初めは、足立区で行っていましたが、次に日暮里駅の前、そして今は西日暮里駅の前で礼拝を守っています。どちらも、とてつもなく交通の便が良いところです。

でも私が、「人々が集まりやすいから、そこにしよう」と思ったのでしょうか？いいえ、まずもって日暮里という東京中心部で行うなど、家賃があまりにも高すぎます。ところが、日暮里駅前の教会で、韓国人の宣教師、しかも中国の人たちに牧会している方に出会いました。その教会は午後には礼拝を守っているから、午前中を日本人の教会に使ってほしいと誘われました。しかも、場所は日本語学校の中です。その社長がクリスチャンの方で、その費用の多くを学校が支払っておられます。

そして、社会経験のあるなし、であります、これも、「神にその働きに召されている」という大前提があるかないかが大事で、社会経験があるから牧会者としてよりよい働きができるのではありません。あくまでも、結果としてその社会経験があることが主に用いられるかもしれませんが、やはり、「こうやったら、こうなるのではないか？」ということではないのです。同じように、賛美奉仕も同じです。歌える、あるいはギターが弾けるという技術があるから賛美できるのでは決してありません。

聖書を教えるコミュニケーション能力についてであります、私の場合、私が救われたきっかけは、何か知っていますか？大学のサークルで、英語討論会ですべての試合で負けたことの挫折でした。ディベートは論理的思考を養う、すばらしい場ではありますが、私は他の新入生よりも二倍以上の時間をかけ、準備をしましたが、試合で全敗したのです。そしてパートナーの男性にも嫌われました。徹底的な挫折でした。それでクリスマスに教会に行き、自宅に帰宅後、人生を振り返って、神に背を向けていたことを主に告白したのです。このように公のコミュニケーション力において、最もできないところから始まりました。先ほど話した、「愚かな者、力のない者、取るに足りない者」を神は選ばれるのです。

もう一つは、「成熟した人々に、神が啓示によって知恵を与えられる」ということです。

2:6 しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。2:7 私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定め

られたものです。2:8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。2:9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

成人の間での知恵、とは何でしょうか？ヘブル書 5 章 14 節、「しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」御言葉をしっかりと咀嚼して、それを実生活に当てはめる生活を送って、その経験を積んでいる人です。ただ御言葉を聞いて、頭の中で整理しているだけではなく、それを具体的に教会生活に当てはめるのです。これをいつも行い、独りだけでなく、知恵を尽くして互いに教え、戒め、励ましていく中で、良い物と悪い物を見分ける感覚が身につきます。

4A 御霊による解き明かし 10-16

そして神の知恵によって、大事な要素は、「御霊による示し」であります。

2:10 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。2:11 いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。2:12 ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。2:13 この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。2:15 御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分は何れによってもわきまえられません。2:16 いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。

教会を建て上げる時に必要な知恵は、すべて御霊によって与えられます。御霊によって、神の御言葉をどのように適用させるべきか、その知恵が与えられます。大事なものは、「生まれながらの人間は、御霊に関することを受け入れない」ということです。日本語に、「似て非なるもの」という言葉がありますね。教会はある意味、会社のようにもあります。家族のようにもあります。ある時は、サークルのようにもあります。学校のようにあるかもしれません。そして他の宗教と変わらない面もあります。そこで、これまで培ってきた知識で教会での物事を動かそうとします。けれども、全く性質の異なるものです。例えば、チンパンジーと人間が類似性があるからと言って、チンパンジーに対するように人間に接したら、とんでもないことになります。人の知恵で、キリストの満ち満ちている教会に接したら、同じことが起こるのです。そこで最後に、3 章 1-3 節だけ読みたいと思います。

3:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。3:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。3:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。

御霊によって救われたのに、十字架につけられたキリストにある神の知恵を通り過ぎて世の知恵で事を行うときに、それを「肉に属する者」ということになります。キリストの十字架の前で、自分に死んでいないとき、そして自分が生きるのではなく、キリストに生きていただくことをしないとき、それは生まれながらの人間とまったく同じことを、クリスチャンと呼ばれる人も行ってしまいます。 「ただの人のように歩んでいる」とはそういうことです。ある人がこう言いました。「教会は、社会の縮図である」恐ろしいことに、犯罪心理学の専門家の間では、「猟奇的事件の背後にはキリスト教の陰が」とまで言われているそうです。「クリスチャンなのに、なんで？」と思われることを、大きな事件にしる、小さな事柄にしると思いますが、いいえ、私たちが御霊ではなく、肉に従って反応したら、世の人とまったく変わらないことを行ないえるし、実際に行っているのだということでもあります。

肉的なクリスチャンは、自分が十字架につけられているとみなしていない人です。自分の肉をそのまま放置している人です。イエス様を受け入れたとしていますが、イエス様に従うには、自分を捨てないといけません。そして御霊に従うのです。「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。(ローマ 8:13)」肉を殺す、切り裂くのです。身が切られる思いをしますが、しかしそれが真の平安をもたらすことを知っている人です。これを行っていないので、肉が安住したままクリスチャン生活を送ろうとします。いいえ、御霊のほうに来れば、平安が与えられます。恐れず十字架のところに来てください。自分が愚かであることを恐れずに認めてください。そこに初めての平安があります。